

絵画の歴史様式をめぐる 題材シーケンス



題材 1: ポップアートとシュルレアリスム

題材 2: 尾形光琳とレンブラント
身体的鑑賞による絵画様式
の知的理解を目的とした実践

題材 3: 印象派の筆触 (タッチ)

題材 4: 「微笑み」をください♥

題材 5: 狩野派絵画と子どもの表現

美術の知的理解に向けて

絵画教育には、表現や鑑賞の活動と美術史的知識を学ぶ活動とが有機的に連携し、お互いを参照しあいながら、美術の知的理解を深めてゆくような内容が必要であると、私たちの研究プロジェクトでは考えています。

なぜなら、いつの時代でも芸術家というものは、社会から隔絶した個人として制作しているのではなく、常にその時代の社会と密接に関わり、美術史を参照しながら、歴史の中にわが身を置いて、過去から受け継いだ問題を同時代の芸術家たちと共有し、未来に伝えるべき新たな問題を探求しているからです。言い換えれば自分の制作を、歴史というフィルターを通して普遍化させているともいえます。故に子どもたちの表現活動にも、そういった歴史意識の裏付けが必要なのではないでしょうか。

そこで、子どもたち自身の表現活動が、歴史的にどういう意味を持っているのかを学ぶことにより、美術に対する知的好奇心が一層刺激され、同時に美術に関する歴史的知識が体験的に理解できるような題材の開発に取り組みました。

歴史様式のシーケンス

題材の開発にあたっては、絵画にとって重要な概念や方法をテーマとして設定し、それを複数の芸術運動や歴史様式を通じて多面的に学習できるように構成しました。

例えば、題材 1 では 20 世紀絵画における「イメージの異化」をテーマに、ポップアートとシュルレアリスムを扱います。また題材 3 では、絵画空間の表現に着目し、同時代の東洋と西洋の表現の違いを体験します。

個々の歴史様式については完結した題材として実践できるようにし、それらを連続したシーケンスとして扱うことにより、設定されたテーマが浮かび上がってくるような仕組みになっています。

今回ご紹介する題材の中には個別の題材として開発されたものも含まれていますが、いずれもテーマの設定によって、組み合わせられる歴史様式が新旧・東西の枠を超えて拡がり、子どもたちが美術史について俯瞰的な視点を獲得できるのではないかと考えています。

[湯川雅紀]